中国社会的家族・民族・国家的 话语及其动态
──东亚人类学者的理论探索

(Senri Ethnological Studies no. 90)

韩敏・末成道男编
国立民族学博物館／ 2014 年／中国語

本書（和訳：中国社会の家族・民族・国家のディスコースとその動態──東アジア人類学者たちの理論的探究）は 2012 年 11 月 24 日～ 11 月 25 日に国立民族学博物館（以下民博）で開催された国際シンポジウム「中国の社会と民族──人類学的枠組みと事例研究」の論文集である。

本国際シンポジウムは、民博の機関研究「中国の家族・民族・国家のディスコース」（代表：韓敏 2012.4–2015.3）を立ち上げてから初めての成果発表会であり、日本文化人類学会の後援を得て、中国社会科学院民族学・人類学研究所と韓国のソウル大学から研究者を招き、2 日間に 94 人の参加者があった。

本書は二つの目的をもっている。まず、中国社会における家族のディスコース、「民族」構築の理論的系譜、および国家・社会関係のパラダイムを明らかにすることである。家族・民族・国家は人類の普遍的現象である。中国の場合、これらの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の社会と文化の連続性と非連続性を作りだす重要な要素でもある。本書は家族・民族・国家のディスコースを考察し、中国社会の構造と動態を明らかにするための有効な理論的枠組みを提示しようとする。

もう一つの目的は、日・中・韓の国際共同研究を通して、グローバルな観点から、民族の概念とそれにかかわる制度が、国家、地域、エスニックグループ、企業、個々人などによっていかなるディスコースとして生成され、また日常生活、歴史記憶、観光開発と企業経営の文脈においていかに展開されているのかを考察する。中国の国民国家の成立と社会主義政権誕生以降の民族・国家の概念とその動態を民族誌的に検討する。

本書は、14 名の人類学者と歴史学者によって執筆され、①家族・民族・国家と生 / 熟のディスコース、②国家枠組みの中の文化遺産とその資源化、③歴史の視点からみる民族とその文化の構築の 3 つの部分によって構成されている。

第 1 部は中国社会の基本的な概念である家族を東アジアの中で比較検討し、ディスコースや制度としての中国の家族と東アジアの諸社会との類似性を提示した（末成道男）。また、「民族」構築の理論的系譜を旧ソ連およびヨーロッパの国民国家のモデルまでさかのぼり、中国の国家レベルの民族のディスコースのもつ連続性を明らかにした（翁乃群）。一方、中国の国家と社会の関係性においては、欧米で主流である国家と社会の対立関係を前提とする抵抗論とは違って、両者間の共謀、競合と妥協の側面がむしろ多く観察されていることがわかった（金光億）。近年、国境を超えた宗族のネットワークの形成、祖先崇拝や族譜編集の復興などは、民間と国家の共謀によるものであることが事例として上げられている。

また、レヴィ＝ストロースの構造主義人類学の「生のもの／火を通しているもの」の二分法をふまえた上で、漢族社会においては、「生／熟」という二項対立のカテゴリーが、食べ物からエスニックグループ、個人を中心とした人間関係の作り方、人間の成長過程にまで徹底されており、とくにそれによる異民族の分類が、中国歴史上における複雑な民族間関係に計り知れない影響を与えたことが指摘された（周星）。

第 2 部においては、ディスコース構築の諸主体とその構築プロセスに着目することにより、民族のディスコースが、観光開発、アイデンティティの確立、建築や衣装の創出に活用され、文化資源にも転化したことを明らかにした（塚田誠之、色音、河合洋尚、宮脇千絵）。アカデミックのディスコースが行政や経済的枠組みに組み入れられると、本来多様で、流動的、包括的な文化現象を一律化、固定化あるいは分割してしまう傾向がある。また、構築されたディスコースは、時間と空間を越えて、影響力をもち続けたり、変えられたりすることもある。たとえば、国家のコンテキストの中で「迷信」のディスコースで語られてきた満州族の民間信仰の焼香とダフール族のワミナ儀礼は、近年、文化遺産ブームが高まってくると、シャーマン文化のもつ国際性、観光資源としての価値が認められ、政府や知識人によって「文化遺産」のディスコースに置き換えられた（劉正愛、呉鳳玲）。

第 3 部は、漢方薬の老舗や国際移民が、20 世紀において社会主義の国民国家と地方行政の管理の枠組に組み入れられた過程（張継焦、李海燕）、都市開発におけるエスニック空間や歴史事件に関する複数の主体による異なるディスコース構築のメカニズム（今中崇文、田村和彦）を分析した。

東アジアの諸社会は、異なる近代化の道を歩んできたが、共通の文字と倫理基盤を有してきた東アジアの人類学者には、問題意識と研究方法において多くの共通点が見られる。本書で提示してきた家族に関する東アジアのモデル比較、人類学と歴史学の結合、ディスコースの構築をめぐる国家と社会間の多様で柔軟な関係性をとらえる視点は、その一部である。これらは、この国際シンポジウムを通じて東アジアの中国研究の特徴として再認識されたものであり、今後もさらなる国際共同研究の基礎となろう。

文　韓敏

国立民族学博物館民族社会研究部教授。専門は文化人類学・中国研究。著書に『回応革命与改革：皖北李村的社会変遷与延続』（江蘇人民出版社 2007）、*Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58, 2001)、編著に『政治人類学：亜洲田野与書写』 浙江大学出版社（阮雲星共編著）*Tourism and Glocalization : Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76, 2010)、『革命の実践と表象：現代中国への人類学的アプローチ』（風響社 2009 年）。